

「実業之富山」編集部編著  
『占領期の地方雑誌

——プランゲ文庫で辿る検閲の足跡』

評者：吉田 健二

GHQ（連合軍総司令部）統治下の占領期は、地方メディアが未曾有の隆盛をみた時代であった。新時代を新聞で、あるいは雑誌を通じて表現する思いが地方の知識人や青年に漲っていた。このことは、メリーランド大学編『ゴードン・W. プランゲ文庫雑誌目録』（2001年）を見ても、収録する検閲雑誌1万3799件中、7割超が東京や大阪以外で発行されている事実でも明らかである。

富山県でも1946年2月、かつて『週刊朝日』の編集長だった翁久允（おきな・きゅういん）が郷土文化誌『高志人』を復刊し、ほかに同年中に俳誌『辛夷』（こぶし）、時事雑誌『時潮』、評論誌『月刊富山』、文芸雑誌『ルネッサンス』などが創刊をみた。本書の発行元の実業之富山社も、この年12月に経済雑誌『実業之富山』を創刊している。

本書は占領期に富山県で発行された雑誌中、『実業之富山』を中心にGHQにおける検閲実態を分析し、あわせて占領期の富山県における雑誌文化の特色の一端を紹介したものである。

なお、本書は実業之富山社の創業60周年を記念して出版された。本書の発行を企画し、中心となって調査を重ね、かつ実際に執筆したのは実業之富山社代表の大野一氏である。先に本書

の章立てを紹介しよう。

- 第1章 プランゲ文庫訪問
  - 第2章 検閲文書が語るもの
  - 第3章 CCD（民間検閲局）の活動
  - 第4章 プレスコード違反
  - 第5章 聯合軍郵便
  - 第6章 事後検閲の呪縛
  - 第7章 文芸復興
  - 第8章 映画とダンス
  - 第9章 学校誌
  - 第10章 職場・地域団体の雑誌
  - 第11章 「実業之富山」とその周辺
  - 第12章 占領期の検閲を振り返る——調査取材を終えて
  - 補遺 GHQ関係者が語る 占領期の富山——元CIC（対敵諜報部）隊長ハリー・K. フクハラ氏  
インタビュー プランゲ文庫で庶民の足跡がわかる——早稲田大学政経学部教授・山本武利氏
- あとがき

※

近年、プランゲ文庫の公開や、山本武利ほか編『占領期雑誌資料体系』（岩波書店、2008～09年）の刊行もあって、占領期のメディアに対する関心が高まっている。しかし占領期のメディア検閲に関する研究は、高桑幸吉著『マッカーサーの新聞検閲——掲載禁止・削除となった新聞記事』（読売新聞社、1984年）や、山本武利著『占領期メディア分析』（法政大学出版局、1996年）に見るように、もっぱら中央のマスメディアが対象とされ、地方メディアの検閲については未開拓であった。

本書は、雑誌検閲をメインテーマにした、占領期における地方メディア分析の先駆けをなすものである。

GHQの検閲に関する基本資料として、プラ

ンゲ文庫と米・国立公文書館所蔵のGHQ／SCAP資料があげられる。前者には富山県で発行された74タイトルの検閲雑誌が収められているが、これらの資料は、現在、国立国会図書館の憲政資料室においてマイクロフィルムで閲覧することができる。

本書で特筆されることは、編者が、これらの第一次資料を収集し、また当事者の検閲官や雑誌発行人からヒアリングを試みてまとめていることである。

調査はアメリカにも及び、編者は2005年9月に渡米され、ブランゲ文庫（メリーランド大学マッケルデン図書館）や、GHQ／SCAP資料が保管されている米・国立公文書館を訪ねている（第1章）。本書は、雑誌制作の現場に身を置く練達の編集者としての編者の取材力、調査力の賜物といってよい。

本書により、富山における雑誌検閲の実態がほぼ明らかとなった。占領期メディア検閲の論点の一つに、GHQのCCD（民間検閲局）がどのような方法で地方雑誌の発行の事実を把握し、当該の出版社や発行責任者とコンタクトをとったのかという問題がある。CCDは各県に優先機関を置いていなかった。

富山県における雑誌検閲は、CCDの第Ⅱ地区（大阪・中之島）が担当だった。編者によれば、富山軍政部は県や警察など行政機関を通じて、またCIC（対敵諜報部）とも連絡をとって情報を収集しこれを第Ⅱ地区の本部に伝達していたという（第2、3、12章）。要するにGHQの各機関及び日本の地方行政機関が一体となって情報を収集し、検閲の実をあげていたのである。

本書は、苛烈で理不尽な検閲の実態について多数その事例を紹介している。通常、検閲はプレスコードに準拠し、定められたキーログを手引きに実施され、削除や掲載禁止の判定がなされてもその理由は知らされなかった。編者によ

れば、検閲官の判断基準は、かなり主観的なもので、とくに詩歌など文学作品の場合、当否は検閲官の解釈次第であり、他方、たとえ比喩的な表現であっても攻撃的、破壊的な語句は削除されたという（第4章）。

例をあげよう。『高志人』は復刊第1号で、高志人会理事長の死を悼む「藻谷銀河の死」と題する弔詞を掲載した。ところがCCDは弔詞中「藻谷君！ 私たちは奈落の底へつき落とされたが、これから血の川を渡り、剣の山をかけ回って、この真の自由をかち取るために邁進しようと覚悟している」という箇所が問題とされ、公安を害する恐れがあるとして削除を命じたのであった。

本書は、『実業之富山』を中心に、『時潮』『短歌時代』『辛夷』『文燈』など雑誌ごとに検閲の実情を紹介していて興味深い。なおCCDの検閲は1947年11月以降、事後検閲に移行する。編者は、検閲が事後検閲となっても編集者や発行人にとっては検閲の「呪縛」が解けることがなく、むしろ実質的に「自己検閲」を招いている実態を子細に紹介している（第6章）。

豊富な第1次資料や、雑誌発行者並びにかつての検閲官を含む関係者の証言をもって構成する本書は、他に例がない特色をもち、占領期の日本ジャーナリズム、とくに新興紙研究をすすめている評者にとって学ぶところ大である。

けれども本書には異論というほどではないが、編者において考察してもらいたい点がある。編者は随所で、GHQの検閲が厳密かつ苛烈であり、出版物においては「検閲の痕跡を残さないよう留意」（28頁）し、検閲の結果、記事を「差し替える場合も、検閲の痕跡を残してはいけなかった」（48頁）と述べている。また編者は「日本のメディアは予想外に従順である」（93頁）とも評しておられる。

通説ないし一般論として、事実そうだったか

もしれない。だが占領期にあっても新興紙メディアのなかには検閲に抵抗した例があった。1945年12月1日、松本重治を社長に、旧同盟通信社の編集局幹部だった長島又男、栗林農夫らが創刊した『民報』（のち『東京民報』と改題）は、むしろ検閲に抵抗し、削除の判定に対しては白ヌキで発行し、あるいは鉛版を削るなどして検閲の存在を明示していた。事実『民報』では19箇所、『東京民報』でも2箇所、鉛版を削るなど検閲の痕跡を歴然と残して発行していたのである（拙著『戦後改革期の政論新聞』文化書房博文社、2002年）。

1946年5月12日、住谷悦治を社長に能勢克男、和田洋一らが創刊した『夕刊京都』の場合も、和田によれば、「検閲の結果をそれほど気にしないで編集していた」「占領軍の検閲があったものの、意に介さず編集していた」（法政大学大原社会問題研究所編『証言 占領期の左翼メディア』御茶の水書房、2005年）という。

※

占領期は、言論・出版の自由の保障や新憲法の制定を背景に、全国各地で個性的で多彩な雑誌が誕生した。富山県で発行をみた雑誌は、プランゲ文庫で確認するかぎり74タイトルであるが、実際はもっと多いだろう。

もう一つ本誌で特筆されるのは、編者が、プランゲ文庫に収蔵されていない雑誌、たとえば文芸雑誌『文燈』（1946年4月創刊）や、『ルネッサンス』などのバックナンバーを収集して、富山における雑誌文化の特色の一端を明らかにしていることである。

富山県における雑誌文化の特色の一つは、戦災や疎開で大都市から北陸地方に移住し、あるいは戦時中に言論の自由を奪われて、地方の新

聞や雑誌に発表の場を求めた知識人や文化人がそのまま担い手となっていた（第7章）。編者によれば『月刊富山』には林房雄、阿部真之助、亀井勝一郎らが寄稿し、『ルネッサンス』の創刊号（1946年4月）は清水幾太郎の評論が巻頭を飾っていたという。また毎号『辛夷』の表紙を飾っていたのは福光町（現南砺市）に疎開していた版画家の棟方志功であった。

率直に言って本書は読みづらい。ここで読みづらいというのは、本書が高踏的で、論点や記述も難解というのではない。事柄や検閲に関する記述が各章に分散的に紹介され、かつ重複が多く、まとまりをもって紹介されていないという意味においてである。

本書のメインは第11章、すなわち編者が籍を置く『実業之富山』にあるだろう。けれども『実業之富山』に関する事柄は各章で言及されている。

このように記述がやや分散的になったのは、本書が、連載記事を単行本にした経緯に起因しているのかもしれない。実は本書は『実業之富山』に2006年1月号から2007年2月号まで連載したのをまとめたものであった。

けれども、このことが本書の価値を減じさせるものでは決してない。本書は占領期の富山県における雑誌メディア検閲をトータルとして、実証的に分析した先駆的な研究である。占領期の地方メディア検閲の分析は、本書をもって第一歩を踏み出したといっていよう。

（『実業之富山』編集部編著『占領期の地方雑誌』一プランゲ文庫で辿る検閲の足跡、実業之富山社、2007年12月刊、261頁、定価1,900円＋税）

（よしだ・けんじ 法政大学大原社会問題研究所  
兼任研究員）